

第14章 朝鮮（韓）半島におけるクマ類の現状とツキノワグマの回復計画

韓 尚勲

大韓民国国立公園局種保全センター

朝鮮半島にはツキノワグマとヒグマの2種のクマが生息している。しかし、主に過去の狩猟、密猟および生息地破壊のためにどちらも絶滅の危機に瀕しており、現在2種ともに絶滅の恐れのある種に指定されている。

北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）では1986年から1995年にかけて、クマの繁殖や商業的利用についての調査が北朝鮮の動物学研究所によって行われた。さらに1996年からは他のさまざまな項目についての調査が行われている。韓国（大韓民国）では、1980年から1984年の間に行われた野生グマの個体数推定調査以外はクマについての研究はない。しかし最近になって、韓国国立公園局の種保全センターによるツキノワグマ回復事業が再開された。この報告は上述の調査と、北朝鮮の動物研究者からの情報に基づいている。

人間とクマの関係の歴史

朝鮮においてクマは母なる神の象徴となる動物である。朝鮮創世神話によると、創始者である檀君（Dan-gun）は、4,340年前に神と女人の姿をしたクマとの間に生まれたとされている。クマの息子によって創建された国は2千年間続いた。

15世紀初頭から、クマの胆がよく効く薬だと信じられ、商業的に売買されるようになった。また、1910年からは銃の一般的使用により、密猟がクマ個体群に深刻な脅威を与えるようになった。さらに、日本による植民地時代には、政府はクマが有害な動物であるとして朝鮮から根絶させようとした（写真14.1）。20世紀初頭には、毎年200頭以上のクマが密猟や狩猟で殺され、その結果20世紀半ばまでに密猟や狩猟で獲られるクマの数は年間50頭未満にまで減少した（表14.1）。

韓国では、1950年代の朝鮮戦争や1970年代まであった密猟によりクマの個体群は深刻な打撃を受けていた。韓国政府は1982年11月4日からツキノワグマを国の天然記念



写真14.1：威鏡南道の利原（Yi-Cheon）で捕獲されたヒグマ（1922年2月9日）

表14.1：1915～1943年に朝鮮半島北半分で捕獲されたクマの数

年	1915	1916	1923	1933	1934	1935	1936	1937
頭数	261	168	193	98	104	62	50	58

年	1938	1939	1940	1941	1942	1943	Total
頭数	63	46	36	50	43	37	1,269

出典：日本植民地時代（1933～1943）朝鮮総督府の統計年報（吉田 1923）。

物第329号として保護している。1980年代以降、道路建設などの人間活動の拡大に起因する生息地の劣化や減少、分断化によりクマは絶滅の危機に直面している。

現 状

ヒグマ

昔から、ヒグマは北朝鮮の東側、すなわち金剛山（Gyunggan）などの山岳地域からなる江原道（Kangwon-do）の平康郡（Ryunggang-gun）法洞郡（Bubdong-gun）にしか分布していなかった（Won 1986）。

北朝鮮の動物学者の報告によると、ヒグマの現在の主な

生息地は標高 1,000m 以上の森林地帯で、北朝鮮北部の咸鏡北道 (Hamgyung-buk-do) にある白頭山 (Baekdu) 登山道付近、咸鏡南道 (Hamgyung-nam-do) と両江道にある小白山 (Soobak) 登山道北部分付近、咸鏡南道の狼林 (Rangrim) 山登山道付近、咸鏡南道と両江道にある赴戦嶺山 (Bujunryung) 登山道、両江道にある咸鏡 (Hamgyung) 山登山道付近などである(図 14.1)。ヒグマが生息している道と郡を表 14.2 に示した。ツキノワグマと分布が重なっている地域では、ヒグマはツキノワグマよりも緯度の高い地域が高標高地に生息している。野生のヒグマの生息数は 60 ~ 210 頭と推定されている。

ツキノワグマ

(1) 北朝鮮

ツキノワグマが生息している道や郡を表 14.3 に示した (北朝鮮動物学者の情報による)。主な生息地は平安北道 (Pyungan-buk-do) の碧潼郡 (Bukdong-gun)、昌城郡 (Changsong-gun)、東倉郡 (Dongchang-gun) にある妙香山

表14 2 : 北朝鮮でヒグマが生息する道と郡

道	慈江 (Jagang)	両江 (Ranggang)	咸鏡北 (Hamgyung-buk)	咸鏡南 (Hamgyung-nam)
郡	狼林 (Rangrim) 和坪 (Hwaryung)	三池淵 (Sanjiyun) 白岩 (Bakam) 甲山 (Gabsan) 雲興 (Woongheung)	茂山 (Moosan)	長津 (Jangjun) 赴戦 (Bujun)

表14 3 : 北朝鮮でツキノワグマが生息する道と郡

道	平安北 (Pyungan-buk)	平安南 (Pyungan-nam)	黄海北 (Hwanghae-buk)	江原 (Gangwon)
郡	碧潼 (Bukdong) 東倉 (Dongchang) 昌城 (Changsong) 泰川 (Taechun) 雲山 (Woonsan) 香山 (Hyangsan) 球壇 (Gujang)	平原 (Pyungwon) 孟山 (Maengsan) 陽徳 (Yangduk) 檀倉 (Hoechang) 新陽 (Sinyang)	新坪 (Sinpyung) 谷山 (Goksan)	板楸 (Pangyo) 淮陽 (Hoeyang) 伊川 (Yichun) 洗浦 (Sepo) 平康 (Pyunggang) 金剛 (Geumgang) 昌道 (Changdo) 金化 (Gimhwa)

(Myohyang) 登山道と、北大峰山脈 (Bukdaebongsan)、阿虎飛嶺山脈 (Aho-biryongsan)、馬息嶺山脈 (Masikryung)、



図14 .1 : 朝鮮半島におけるヒグマの分布

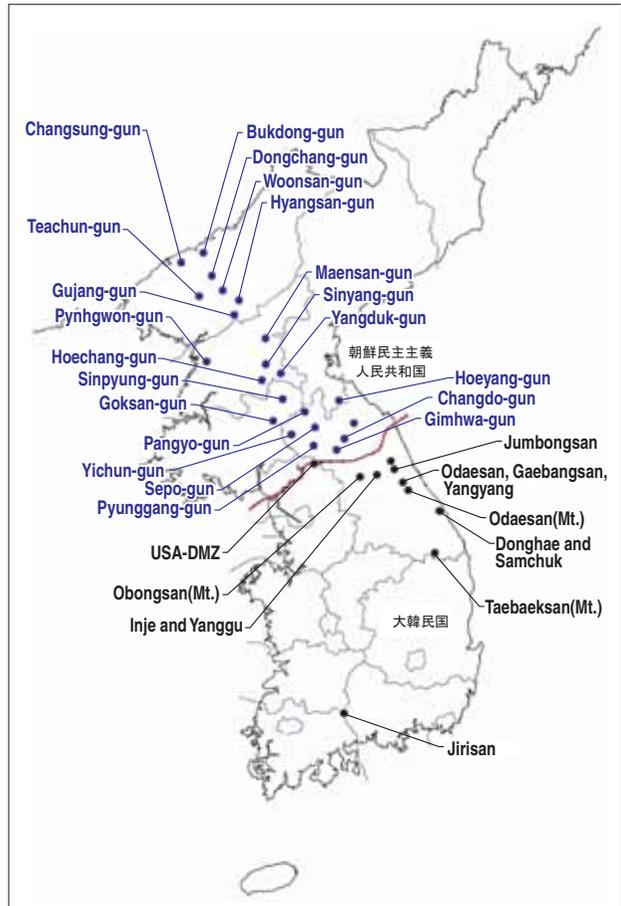


図14 2 : 朝鮮半島におけるツキノワグマの分布

太白山脈が囲む高い山岳地域である(図 14.2)。北部地域ではツキノワグマとヒグマの分布が重なっていると報告されている。1980年代から1990年代にかけて狩猟されたクマの数を表14.4に示した。北朝鮮に生息するツキノワグマは300～1,000頭と推定されている。

(2) 韓国

1950年から1970年の間に韓国南部の智異山で約160頭のツキノワグマが捕獲された。その頃韓国には数百頭のツキノワグマが生息していたと推測される(Han 1997)。

1980年代に野生ツキノワグマの簡単な個体数調査が行われた。韓国野生動物保護学会による5つの山地での調査から、1980～1984年の間に少なくとも50頭のクマが生息していたとされる(韓国野生動物保護協会 1984)(表14.5)。国立環境研究院によると、2001年に21頭のツキノワグマが生息していたが、それ以降に科学的調査は行われていない(表14.6、図14.2)。

飼育下での繁殖

(1) 北朝鮮

北朝鮮の動物研究者の報告によると、野生グマの飼育下繁殖は、商業目的で1960年代終わりに始まったとされる。クマの繁殖は、最近ではいくつかの動物園で小規模に行われている(平壤中央動物園、70頭;元山動物園、30頭;江界、サリ動物園、10頭以下;海州動物園、咸興動物園、恵

表14 4 : 北朝鮮におけるツキノワグマの捕獲記録 (1980年代～1990年代)

年	頭数と場所
1984～1986	平安北道の碧潼郡、昌城郡、東倉郡、雲山郡、球場郡、香山郡で23頭
1987	62頭(平安北道で8頭、慈江道で38頭、両江道、咸鏡南道、咸鏡北道で合わせて16頭)
1990年代	1980年代に比べて捕獲数は減少した

表14 5 : 韓国の5つの山地におけるツキノワグマの生息数調査結果 (1980年～1983年)

山 地	1980	1981	1982	1983
雪岳山 (Seoraksan)	10	10	11	10
智異山 (Jirisan)	30	32	34	36
五鳳山 (Obongsan)	4	4	4	2
五台山 (Odaesan)	3	4	4	4
太白山 (Taebaeksan)	3	4	4	4
合計	50	54	57	56

* 出典：韓国野生動物保護協会

表14 6 : 2001年における韓国のツキノワグマの推定生息数

地域	
JSA(共同警備区域)～DMZ(非武装地帯)	3
雪岳山登山道(雪岳山から點鳳山)	3
麟蹄(Inje)と楊口(Yanggu)メボン山、ハンスク山)	5
東海(Donghae)と王陟(Samchuk)頭陀山(Dutasan, Chungoksan)	1
五台山、Gaebangsansan、襄陽	3
太白山	1
智異山	5
合計	21

* 出典：国立環境研究院(2002)

山動物園、5～6頭;清津動物園、3～4頭)。

(2) 韓国

韓国では、中国、日本および東南アジアからクマを輸入し、そのクマを繁殖させて他の国に輸出することを目的とする繁殖事業が1980年代に始まった。しかし、輸出に関する長期計画がなかったために、5年間に輸入された500頭のクマは韓国内部に分散してしまった。2006年には、国際的なクマの輸入と移送を禁止する厳しい法律と規制ができ、人工繁殖で生まれた2,000頭のクマが、約100ヶ所の繁殖施設で育てられているが、飼育条件は劣悪である。

法的保護

北朝鮮政府は、少数のクマの生息地のいくつかを天然記念物に指定し、慈江道(Jagang-do)の龍林郡(Ryonglim-gun)(天然記念物第124号)、咸鏡北道の延社郡(Youngsang-gun)、冠帽峰(Gwanmo-bong)(天然記念物第330号; Ri and Li 1994)などを含め法的に保護した。韓国政府はクマを保全するために、文化財保護法に基づいてツキノワグマを天然記念物(天然記念物第329号)に指定した。

韓国では1998年2月19日に、環境部(Ministry of Environment)が自然環境保全法に基づいてツキノワグマを絶滅の恐れのある種にリストした。2005年2月10日に改定された自然環境保全法の最新版では、ツキノワグマは希少野生動物種に指定されている。

回復事業

環境部が計画し、韓国国立公園局内の種回復センターが実施している現在進行中の導入事業の目的は、ツキノワグ

マを含めたすべての希少種が安定した個体数になるまで回復させることである。「韓国の希少種回復のための新技術の研究」と名付けられた新しい研究は国立環境研究院によって1998年から2001年まで実施された。2001年には国立環境研究院は実験的に4頭のクマ(オス2頭、メス2頭)を韓国のペア・ファームから智異山に放した(国立環境研究院2002)。2002年に、事業の他方面の研究と実施、例えば放した幼獣の現地でのモニタリングや回復への進展などの調査のため、環境部はその補助機関である国立公園局に再導入事業を委託した。

実験的に放された幼獣は、環境に適応するかどうかが32ヶ月間モニタリングされた後、2004年6月に再捕獲され、現在は一般人への教育のために小さな檻の中で飼育されている。

さらに、国立公園局の種回復センター(ツキノワグマ管理チーム)は、ロシアから韓国へのツキノワグマの導入に関する覚書にサインした。そして、約8、9ヶ月の当歳仔12頭が、2004年10月(6頭の当歳仔;メス3頭、オス3頭)と、2005年9月(6頭の当歳仔;メス4頭、オス2頭)にロシアから韓国の智異山に導入された。また、2005年4月には北朝鮮と韓国との間の交換事業により、8頭の幼獣(メス4頭、オス4頭)が北朝鮮から韓国に導入された。2006年には導入されたツキノワグマのうち14頭が自然下で生存している。他の6頭のクマのうち、2頭の仔グマは密猟さ

れ、残りの仔グマは自然環境に適応できなかった。もし智異山に30頭以上のクマを導入すれば、2012年までに自然条件下で個体数は50頭に達するだろうと予想される(50頭は個体数を維持する最低頭数)(表14.7)。

2005年には国立公園局のツキノワグマ管理チームは国立公園局研究所の種回復センターに改組され、その責務は他の絶滅の恐れのある種の回復事業にまで広がった。

引用文献

- Han SH (1997) Natural history and status of Asiatic black bear in the Korean Peninsula. International Symposium for Conservation of Asiatic Black Bear. (in Korean and Japanese)
 Korea Society for the Protection Wild Animals (1984) The 2nd Survey Report of Wild Animals. Reports of Korean Society for the Protection of Wild Animals No. 8. 135pp. (in Korean)
 National Institute of Environmental Research (2002) New Technique for the Restoration of Endangered Species in Korea. Ministry of Environment, Seoul. (in Korean)
 Ri SD, Li GC (1994) Checklist of Natural Monument in DPRK. Agriculture Press. 195pp. (in Korean)
 The statistical yearbook (1932-1943) of the Japanese Government-General of Chosen. (in Japanese)
 Won H-K (1968) Korean Mammals. Institute of Science Press, Pyongyang. (in Korean)
 Yoshida Y (1923) Control on harmful animal in Chosen. Zoological Magazine 36:330 - 332. (in Japanese)

(北村英美訳)

表14.7: ボルテックスシュミレーションに基づく智異山のツキノワグマの生息数の変化予測(2004~2012年)

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
在来の野生個体(頭数)	5	5	5	5	5	5	5	5	5
毎年の導入個体(頭数)	6	6	6	6	6				
導入個体内、自然に適応した個体(頭数)	4	4	4	4	4	0	0	0	0
繁殖可能な野生個体(頭数)	0	0	0	2	2	2	2	2	2
繁殖可能な導入個体(頭数)	0	0	0	4	8	12	16	20	20
繁殖可能な新世代(頭数)	0	0	0	0	0	0	0	2	6
繁殖可能な番の数	0	0	0	1	2	1	2	5	2
出産数	0	0	0	2	4	2	4	10	4
毎年末の個体数	9	13	17	23	31	33	37	47	51

仮定: 1) 在来の野生個体の頭数は期間中一定、2) 自然に適応できる個体は導入個体の0.67、3) 繁殖は4歳に開始、4) 2頭の在来の野生個体の繁殖は2007年に始まる、5) 1回の産仔数は2頭。